
名無しからの手紙

白竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しからの手紙

【Nコード】

N5189BA

【作者名】

白竜

【あらすじ】

僕は普通に生活している中学生。

しかし急に僕の家に送られてきた名無しと言う名の人から送られてきた手紙。そこには意味の分からない事が書いてあった！！

僕は友達にも送られてきてるらしいので友達達と名無しとはだれか手紙の意味とはなんなのかを説明していくのです＞＜

名無しからの手紙（前書き）

皆さん、この小説は僕が始めて書いた小説です。

少し下手で語彙も少ないかもしれませんが一度読んでみてください！！

この物語は探偵が好きな人やファンタジーが好きな人におすすめします。

では、あなたを不思議な世界へとお連れいたします。

名無しからの手紙

僕はいつも通り朝7時に起床した。

やっぱり朝は「気持ちいいな」

と感じながらポストを覗きにいくと僕宛に一通の手紙が来ていた。

誰からだろうと見てみると名無しとだけ封筒の後ろに書いてあった。

僕は名無しって誰？と思いながらその封筒を開けてみて中の手紙を取り出した。

そこには一枚の便箋が入っていた。その便箋を見てみると真ん中に一文文字が書かれていた

「この世の中の人々には与えられた使命がある」

この一文だけが書いてある便箋。

初めはあて先を間違えたのかな？と思い普通に気にせず机の上においていた

僕はこの時まだこの一文から始まる思いもよらぬ出来事を想像してなかった

僕は今、中学2年生の中学生だ！皆からは「白竜」と呼ばれてる。

なぜかは知らないけど中2の初め頃からこういう風に呼ばれるようになった

明日は結城という友達の誕生日、僕は隼人という友達と今日誕生日プレゼントを買いに行く予定なのだ

後一分ぐらいで隼人が来るだろう。そう思っていると『ピンポーン』とインターホンの音が鳴り響く

隼人が来たのであろう。そう思って出るとやはり隼人が待っていた！

「少し待っててくれ、用意がまだ整ってないんだ！」

と僕は太急ぎで用意をしてきた。

何を持っていくか迷ったけどお金と時計は必ずいつももっていくようにしている

そして自転車でデパートに向かっている途中の事だ、隼人が急に意味の分からない話をしてきた。

「あのさー白竜、俺の家に不思議な手紙が来たんだが聞いてくれるか？」

「おう、どんな話だ？」

「今日の朝8時ぐらいにポストを見ると名無しと言う名の人物から手紙が届いていたんだ」

それを聞いた瞬間僕は啞然とした。それは今日僕の家にも届いていたからだ

それでその僕の家にも届いていた事を隼人に言うと隼人は急に閃いた様に

「もしかしたら結城の仕業じゃないのか」

と言い出した。僕もそのときはそう思って納得していた。

そんな話をしていたらもうデパートについてしまった

僕は隼人に結城は何がほしがるのかなって聞いてみた

そしたら隼人は自慢げに「俺は買う物を決めている」と鼻高々に言い出した

僕はそう言っている隼人の後ろをついていくと隼人はゲーム売り場に向かっていった

僕は何を買うのが気になり隼人に聞いてみた。そしたら隼人は

「俺は今ハマっている幻覚操作ゲームを買ってあげようと思うんだ」と言った。隼人はそんな3000円位するものを買うのかと思い僕も勇気を振り絞り2400円のエアーガンを誕生日プレゼントにしようと思い買った。初めは500円くらいにするつもりだったけど

「まあいいか」と思ってしまった。僕はその軽い気持ちに負けてしまったのだ。

後々考えるとこれで今月のお菓子はもう買えないなと後悔した。そしてデパートから隼人と帰ってる最中にちょうど部活帰りの雄大と明に出会った。

二人は疲れていたらしく「バイバイ」としか言葉を交わさなかった。そして隼人とも別れを告げ僕は家に帰った。

玄関には靴が一足もないお母さんは買い物かなと思い適当に冷蔵庫の中にあった竹輪を食べた

そして自分の部屋に戻りあの手紙をもう一回読み直してみた。

僕は意味を深々と考えたがやはり結城のいたずらろうと思いきその手紙を机の上においた。

一階で「ただいまー」とお母さんの声がした。今は午後4時だ。

お母さんが買い物から帰ってきたのであろう、僕は「おかえり」ただけ声をかけて

明日の学校の準備を済ませた。

そこにしっかり結城に渡すプレゼントも入れておいた

これで学校の用意はばっちりだ。

学校の用意を済ませた僕は一階に降りてお母さんに手紙のことを話した。

そしたらお母さんは笑いながらいたずらじゃないの?と言ってきた僕は「やはりそうなのか」と思い明日までその手紙の事に触れようとしなかった

そして僕は二階に上がり急に疲れが襲ってきたので睡眠をとった
僕は急に「はっ」と目が覚めた。今は何時だ？

僕はベッドの上においてある目覚まし時計で時刻を確認した
そしたら夜の8時だ、僕が寝てから結構時間がたったのであろう
一階に降りたらお母さんが晩御飯の片付けをしていた

僕のご飯はテーブルにおいてある
僕はお母さんに質問した。

「これを僕が食べていいの？」

と僕は言った。そしたら

「うんそれを食べていいよ」

とお母さんが言った・・・

僕は夜ご飯をゆっくり食べてテレビを見ていた
それで夜ご飯を食べ終わりお風呂やすべての事が終わり寝ようとした
もう11時を超えている。今日はもう寝ようかと思い電気を消し布
団に入った。

二日目の朝、今日はいつも通りの学校だ。

僕は急いで朝ごはんを食べてポストをチェックした。

また広告と一緒に封筒が入っていた今日も名無しからだ

僕は「結城はなにがしたいんだ？」と思いその封筒を開けた
そしたらそこにはまた手紙が入っていて手紙の真ん中に一文

「今日は僕《名無し》が使命を果たすべき時だ。」

また意味の分からない事が書いてある。

これで二枚目だ、今日はこの手紙の事を結城に聞いてみようと思いいいで学校に行った。

まだ僕の教室には人が二人しか来ていない結城と隼人は僕と同じクラスなので一時たったら来るであろう

僕が学校についてから5分が経過したころであろう。隼人が青ざめた顔で教室に入ってきた

僕は明らかにいつもの隼人と様子が違うので隼人に声をかけてみた

「隼人、どうした気分でも悪いんじゃないのか？」

そしたら隼人はかばんの中から一枚の手紙を差し出してきた

僕はその手紙を見てみた。そしたらそこには思いもよらぬ事が書いていた

「僕は今日皆が成し遂げなかった事を実行に移すんだ。」

「それは神山中学校の2年生を全員僕の支配下にする事なんだ」

僕はこれを見て思った。これは確かに名無しからの手紙だがいつもと違い二文書いてあった

僕は隼人に「こんなのでたために決まってるじゃないか」と慰めてみた

そしたら隼人も気持ちを少し落ち着かせたらしく神山中学校のことをいきなり話し出した

「俺は今日の朝この手紙を見てから神山中学校のことを調べてみたんだが神山中学校は

俺たちの学校の隣の校区にある学校らしいもしこの言ってる事が本当なら約180人を動かすってことだぞ
そんなことが一人で出来るのか？」

と隼人が熱心そうに言ってきた。

僕はそこでようやく気づいた。これを書いたのは結城じゃないってことに・・・

隼人はもうとっくに気づいているのであろう。

そこにちょうど良く結城が登校してきた。僕達は結城にこの手紙のことを話した。そしたら結城の家にも

僕らと同じ手紙が来ていたらしい。結城はそういうのを気にしないやつだから

ゴミ箱に捨てたって言うけど、これは後々重大な事になっていくと僕はそう思った。

そしてチャイムがなり先生が教室に入ってきた。

「起立、礼、おはようございます。着席」

日直の声と共に皆が挨拶をした。

先生の話が終わり8時45分だ。一時間目は国語だったので静かな授業だった。

ついに10時半を含む二時間目の始まりだ。

二時間目は体育だった、近くの公園を走るという一番好きなことだ僕は公園の時計を気にしながら隼人と結城と同じペースで走った。

あと1分で10時半になるであろうところに100羽近いからすが急に飛んできた

初めは驚いて声が出なかったけどすぐに気がついた、

10時半に神山中学校のほうからからすが飛んできたという事は神山中学校で何かあったのかもしれない

僕は隼人にそのことを言おうとして隼人を見た。そしたら隼人も僕と同じことを思っていたらしく

結城も多分同じことを思っていたと思う。

でも体育の授業を放棄する事も出来なくてもややとした気持ちで体育を終えた。

二時間目が終わり皆が教室で着替えてるときに急に先生が入ってきた。

「皆いったん席についてくれ。」

と先生が叫んだ。

僕は「どうしたんだろう」と思いながら席についた、クラスのみんなもおかしそうな顔で席についた

先生が会話を少しずつはじめていった。

「今日の10時半ごろ突然神山中学校のほうから烏が飛んできたんだがそのことについて話したいと思う

神山中学校のほうから連絡があったんだが神山中学校の二年生とその時授業をしていた担任の姿が消えたらしい。まだはっきりとしたことは分からないがこれは誘拐事件かもしれない隣の校区で起こったことだから今から集団下校になった、急いで荷物をまとめて体育館に集合だ」

と先生がそのことを告げて教室から出て行った。

そしたら雄大と明がめっちゃうれしそうな感じで「二時間目で終わるとか馬路でラッキーじゃん」

って言った。まあクラスのほとんどがそのことで喜んでる、でも僕と隼人と結城は違った。

今から一体何が起こるのかで恐怖に怯えていた。そしてすぐに僕達は体育館に向かった

校長先生の話が終わって集団下校をするグループに別れ隼人と僕の家は遠いので集団下校でも違う

グループになった。隼人が言った。

「後でメールするから見てくださいよ」

僕は大きくうなずいた。そして僕も別のグループで下校した僕が家に着いたときには隼人からのメールが来ていた。

その内容は「今帰ったぜ。白竜はまだ帰ってないのか？帰ったらすぐにテレビをつけてくれ、大変な事になってるぞ」

このメールを見て言われたままにテレビをつけた。

バラエティ番組や普通にニュースがやっているだけだった僕がテレビを消そうとした瞬間に

ニュースで神山中学校のニュースが流れた。

もうそんなところまで情報が届いているのかと思いつつもそのニュースを見ていた。

でもそのニュースでも「誘拐じゃないんでしょうか」としか言わなかった。

僕は「誘拐じゃないと思ってるのにな」と口に出してしまった。

僕はお母さんが作ってくれたお弁当を家で食べてすぐに隼人の家に行った。

隼人と結城と遊ぶ約束をしていたのだ。誕生日プレゼントはそこで渡す事になってしまった

結城はまだ来ていなかった。僕は隼人の家に上がらせてもらい二階で隼人と話をしていた

そこにインターホンが鳴り響いた。結城が来たのであろう

隼人は少し待っていてくれといいドアを開けに行ったそして結城が来た。

僕は隼人と同時に声を合わせて隼人の部屋に入ってきた結城に言った

「誕生日おめでとー　これが誕生日プレゼントだよ」

結城は初め戸惑いを隠せなかったのだがめっちゃうれしそうに「あ

りがとう」って言うてくれた

僕はそういう結城を見てとてもうれしかった。結城はいろいろ俺達が上げた物で遊んでくれてそれを見ている僕らも楽しかった。

そしていろいろ遊び終わって疲れた後、俺達が集まって本題に入った。今日起こったあの出来事は人間の仕業じゃないと結城が言った。

俺達はそれを完全否定しようとして論を言い通そうとしたのだが結城の論に負けて論破されてしまった。

俺達はみんなでその手紙の犯人を突き止めようという案を考えた。

僕は「ポストの前に監視カメラを仕掛けるのはどう？」という案を出した

みんなは僕の意見に賛成してくれた。

僕はそのことを詳しくみんなに説明した。

「まず、ポストの横にこっそりカメラでも携帯でもいいから録画できるものを仕込んでおく。

そしたら誰がいつポストに手紙を入れに来るか分かる」

僕は詳しく説明し終わった後それを実行に移すため皆解散した。

僕は早速家に帰りリビングの棚においてあるデジタルカメラを取り出した。

そして自分の机の引き出しにそれを隠しておき夜になったら仕掛けに行こうと思った

僕がもう一回手紙を読み直してみた。そしたらお母さんが仕事から帰ってきた。

すぐに夕飯の支度を始めるといい台所に向かっていった

今思うともう夜の7時だ、僕はいつの間にか昼寝をしてしまっていたらしい。

僕は机の引き出しに隠していたカメラを持ち出し外の空気を吸ってくるという嘘をつき外に出た。

あとはポスト横に茂みにカメラを設置するだけだと思い一応確認もした上で仕掛けておいた。

そして家に戻り夕飯を食べてお風呂にも入りその日はベッドの上で友達と携帯で電話をしていた。

「今日から一週間休みって最高だよな！もう遊びほうけてやるぜ」

と雄大が言った。

「そうだな。でも今不可解な事が起きてるんだ。雄大には分からないよな」

「不可解な事？俺にも起きてるんだけど・・・変な手紙が送られて来るんだ」

それを聞いた瞬間僕は驚いた！

「雄大、それは本当の話か？いつから送られてきたんだ？どういう内容が書かれているんだ？すべて詳しく説明してくれ」

僕は熱心になりすぎてたのか質問攻めだった。

雄大はいきなりすぎてびっくりしてるが冷静に教えてくれた。

「俺はいつも朝に新聞を取りにポストに行くんだけどその時に俺宛に名無しから手紙が来るんだ。

しかもその内容がなんかアニメみたいでさ。【お前は魔法を使う事が出来る】の一文だけ書いてあったんだよ意味がわからねーよな、まあその手紙はほったらかしにしてるんだけどさ」

僕は言葉を失った。俺達以外にも手紙が回っているなんて思っても見なかったからだ

「おい、白竜どうした？ おーいいまいるのか？ そのことがどうしたんだ」

「いやなんでもない、いろいろ聞いてすまなかったな。今日はもう寝るわお休み」

「おうそうか。なら切るぜお休み」

ブチップープープー

僕の携帯からこの音だけが聞こえてくる・・・

僕はすぐに隼人と結城にこのことを教えた。

隼人と結城はびっくりしたらしくメールでもそれが伝わってくるほどだった。

それと隼人も結城もカメラを仕掛けたらしく準備が整ったようだ！

後は明日の朝にそれをチェックして犯人を突き止めるだけだな。

僕は早く朝が来てほしいと思いつぐに寝た。

犯人はついに分かってしまうのか？ あの手紙の意味は一体なんなんだ！！

次回に続く＞＜

名無しの正体（前書き）

登場人物…白竜【14歳】 隼人【14歳】 結城【13歳】 雄
大【13歳】

名無しの正体が暴かれるときこの上の四人が重大な鍵を握る＜＜

名無しの正体

僕は目が覚めた！頭が少し痛い・・・

そうだ、僕は思い出した。

そしてすぐに布団からはいでてポストに向かった！

「白竜？どこに行くの？」

お母さんの声など今の僕には届かなかった

僕はポストの横からカメラを取り出しこっそり服の下に隠して家に帰った。

お母さんが話しかけてきた。

「急に急いでどこに行ってたの？一体外で何してたの？」

僕はうまい言い訳が見つからないか探した。

「ああー外に友達がいたから話に言っただけだよ」

「それならいいけど・・・隠し事はしないでよ」

「分かってるって」

って言いながら僕は二階に上がりすぐに録画してるビデオを見た。

そしたら8時間撮れていて早送りで見ているがなかなか手紙を入れない人が来ない・・・

僕はそのまま放置して朝ごはんを食べに一階に降りてそこでゆっくり朝ごはんを食べた。

今思えば【いつ何時に入れに来たんだろう。】【何の目的でいれるのだろうか？】

まだ僕にはなにも知らない。しかし分かっているのは今から僕達に何か迫り来る事だ。

僕はそういうことを考えながら朝ごはんを食べ終わり学校に行く支度をした

それに雄大が行っていた事はなんだったんだろう。それも気になるから早く学校に行きたかった

僕はたまたま放置してたカメラを見ると7時間20分だった。結局誰も映らないじゃないかと思っていたらポストの前が少し光っているのに気が付いた誰がいるのか？そう思いながらカメラをみていると、

いきなりどこから現れたのかは知らないが人が立っていた。その人は僕の家ポストを開けてその中になにかを入れていった。僕はその時確信した、こいつが封筒をいつも入れている犯人だと・・・

そしてこのことを伝えるべく僕は急いで【学校に来てくれ】と雄大と隼人と結城にメールした。

僕はポストの中に入っていた封筒を取り出してその手紙を読みながら学校へ向かった！

お母さんの「いつてらっしゃい」という声がどんどん遠く聞こえてくる。

僕は5分で学校に着いて隼人と結城がはなしてる所に割り込んで入った！

「昨日のカメラはどうだった？」

と僕が聞いた。隼人と結城は声を合わせて

「何もいなかったといった」

「嘘だろ？僕の所には人が映ってたんだけど・・・」

「しかも俺も結城も今日は手紙が入ってなかったぞ」

僕は驚いた。なぜか僕の所のだけ手紙が送られてきておりしかもカメラにも人が映っている。

僕はみんなに今日送られてきた手紙を見せた。そこにはこういう風に書いてあった。

「これで生贄となるものは整った。次は聖杯の証に氷林魔法を唱えよう」

この生贄というのは明らかに昨日の行方不明になった2年生である……

もしかしたらその人らは殺されるのか？僕の頭にそういう予感がよぎった。

僕は魔法という文字を見てあることに気づいた。

「そうだ！雄大はいるか？」

「どうしたんだ急に」

と結城が問いただしてくる。僕は昨日雄大と話したことを全部結城と隼人に教えた。

「それは本当なのか？」

と結城が聞いてくる。

「多分本当だと思う」

そういう話をしていたら雄大が学校に登校してきた。

「雄大！早くこっちに来てくれ」

「まだ来たばかりなのにどうしたんだ？」
眠たそうな顔をして雄大が聞いてくる

「昨日、手紙の話をしただろ？それについてなんだが・・・」
僕がそのことについて話そうとしたら雄大が急に自慢げな顔をして
何かを唱え始めた。

「天空より舞い降りし神よ。今ここに力を宿したまえ」

「何を言ってるんだ？雄大」

と僕が聞いた・・・そしたら急に空が黒くなり雷が落ち大雨が降り
始めた。

まさかこれは雄大が起こしたのか？僕は頭の中でそう思った。
でも地球上言葉を唱えるだけで温暖や気候を変えることなどできる
はずがない。

出来たとしてもなんらかの準備が必要だ・・・

それを、ただ言葉を発しただけで出来るのか？不可能に近い事だろ、
でもそれが今日の前で起きている

これは一体どういことなんだ。なんで雄大が魔法みたいなものを
使えるのかそれが不思議で仕方なかった。

隼人はキラキラした目で雄大にどうやったのか聞いたが雄大は疲労
が急にたまりそこに倒れこんだ。

僕達は雄大を家まで運ぶと大雨の中、隼人の家に急いで上がらせて
もらった。

もう体がびしょびしょだよと言いながらさっきの雄大の出来事の事
をもう一回語りだした。

「僕の推理からしてさっきの大雨や雷は雄大がなんらかの方法でや
ったんだと思う」

「でもそれは地球上ありえないことじゃないのか？」
と結城が問いただしてくる。

「地球上ではありえないけど今ここで起きたんだから仕方ないだろ！」

と僕は言った。それにしても本当になんでこういうことができたの
だろう僕はそれが気になって仕方なかった。

俺達はどうして雄大があういうのを出来たのか図書館で調べようと
いう事になり図書館にいった。

もう図書館に行くころには雨も上がっていたが自転車のサドルがぬ
れていたので歩いていく事にした

そして、歩いて5分ほどたち図書館に着いた。

図書館に着いた僕達はまず何から調べたらいいのか考えた。そして
ら隼人が仕切るような感じで

「白竜は魔法の事を結城は天気のことを調べてくれ。俺は手紙の事を
調べてみる」

僕達は隼人の案に賛成していろいろ魔法の事や天気のことを調べた。
そして調べたいくうちに分かってきた事がある。

この地球上には普通に生きる社会人と使命を与えられ生まれてき
たバイオ族というのがいるらしい。

そのバイオ族には名前が付けられずに人間とは別の所に住んでい
ると言われていて本当に存在するのも定かではないらしい。

今の現代人は誰もが信じていないだろうけど考古学者の本にそう書
いてあるし僕達もバイオ族を見たかもしれないから信じてみた。

こういうことから考えると名無しから送られてきた手紙はバイオ族
が俺達になにかを教えるために送ったものじゃないかとみんなで考
えた。

なら雄大はどうなるんだろう。名前もあるのに魔法も使える。これは多分先祖にバイオ族と人間が結婚したのであろう。それでバイオ族の血が混じっているから名前もあるし魔法も少し使える。これですべての筋が通ったことになる。

僕達はバイオ族がどういう生き物でなんの目的で着たのか調べる事にした。

「今日はもう夜の7時だし明日にしないか？」

と結城が言った。僕達もそうしようと思いい図書館から出た。

そして帰ってる最中に僕達はいろいろな会話をした。

僕達はいずれバイオ族と戦わなくてはならない気がする。

そのためにも僕達はバイオ族についてもっと知る必要があった

僕達は皆自分の家に帰りバイオ族のことをパソコンで調べたりして明日情報を提供しようってことになった。そして夜の7時10分くらいに家に着いた。玄関にはお母さんが立っていた。

「こんな夜まで何をしてたの？夜ご飯食べるから早く手を洗って食卓にきなさいよ」

「分かってるって」

僕は手を洗い夜ご飯を食べた。5分で夜ご飯を食べ終わるとその時はお風呂も入らず寝てしまった。

僕はふと目が覚めた、今は夜の11時だった携帯を見ていると着信履歴が一件あった。

雄大からのメールが来ていた。

「昼間は悪かったな。俺も家まで運んでくれてありがとうな俺は地味に魔法が使えたみたいなんだ、バイオ族のことは隼人から聞いた

ぞ。俺もバイオ族のことに協力できたらするしいつでも言ってくれ
よな
ならおやすみー」

俺はこのメールを見てすぐに寝てしまった。

バイオ一族【衝撃の展開】

僕はふと目が覚めた。気持ちのいい朝だ

僕は今日学校がないことをいい気に遊びほうけようとしてた
しかし携帯に着信履歴が一件きててそれを見ると僕は唾然とした。

「助けてくれ白竜、バイオ族が俺を捕まえようとしてるんだ。今は
逃げてるけどこのメールを見たら電話してくれ。頼む」

どういことなんだ・・・隼人が今バイオ族に追いかけてるっ
てことか？

このメールが来たのはつい10分前じゃないか！！
僕はすぐに隼人に電話をした。隼人がなかなか出てこない。

「プルルルル・プルルルル・ガチャ」

「白竜か、助けてくれ俺はもう駄目かもしれない。」

「おいどういことなんだ？今はどうい状況なんだ・・・」

「バイオ族の事を調べていくうちにアジト的なものを見つけてしま
って一人で行こうとしたらこういことになってしまった」

「なんで一人で行くこうとするんだよ！待てよ、いまどこにいるんだ。
それを教えてくれ」

「今か？ハアハア・・・今は雷当町だ。」

「おい、めっちゃ遠いじゃねーかよ、どうしよう」

「もう駄目だ、追っ手がそこまで来ている。うわっ！」

「どうしたっ大丈夫なのか？おい隼人ー」

「プープープー」

馬路か・・・隼人は一体どうなったんだろう・・・

「白竜？起きてるの？朝ご飯食べるよ」

お母さんの声が一階から聞こえてくる。

僕は隼人の身に何が起きたのかをまだ理解できなかった。

でも僕はこのことをメールで結城と雄大と明に伝えた。

そして一階に降りていつもみたいに朝ごはんを食べるとお母さんに気分が優れないから散歩してくると言い外に出た。そして急いで僕はメールを確認する。まだ誰からも返信が来ていなかった。

「クソッ、こういうときになんで返信が遅いんだよ！」

少しいらいらしながら歩道を歩いていた。

歩道を歩いて10分ぐらいがたっただろう。やっと携帯が鳴った。

僕はすぐに携帯を確認した。結城からだった、結城は僕のメールを見た後すぐに隼人に電話をかけたらしい。そういう風にメールには書いてあった。

僕は結城と近くの公園で会う約束をした。

僕が公園についたころには結城はもう来ていた。そこでさっき隼人と電話したことを詳しく話した。

「白竜、隼人は今どうなってるんだ？」

「俺にも今はどうなってるかは知らないんだ」

「そうなのか・・・隼人大丈夫だよな」

「おう・・・隼人はそう簡単にくたばるやつじゃないさ」

「隼人の行方をどうやって探す？」

「確か隼人はバイオ族のアジトを見つけたって言っていたな。俺達も調べてみようぜ！」

「おう、そしたら隼人の行方が分かるかもな」

「そうと決まれば僕の家に来ていいよ。」

「いいのか？なら白竜の家に行かせてもらうわ。」

「あっ雄大からメールがきてるぞ。隼人のいる場所が特定できたみたいだぞ」

「馬路か！どうやって特定できたんだ？」

「分からないが雄大はバイオ族の血を持ってるからな。それでじゃないのか？」

「そうかもな！」

「なら雄大の家に行こうぜ！」

今の時刻は昼の3時半今から雄大の家に行ったら4時くらいに着くのか

「よし！結城、自転車をフルスピードにさせていくぞ」

僕達は自転車が壊れるぐらいの猛スピードを出して雄大の家に向かった。

普段は30分かかるのに20分でつくことが出来た！

「もう駄目だ。こぎすぎて疲れたよ」

と結城が言う。まあ長い距離をフルスピードで来たんだ。疲れるのも無理もない。

インターホンを押すと待ち構えていたようにすぐに出てきてくれた。

「おじゃましまーす」

僕と結城は声を合わせるように言った！

「誰もいないから言わなくていいよ」

雄大が苦笑いしながらそう言った。

僕達は赤面を隠した。

結城が急に雄大に聞いた！

「どうやって隼人の居場所を特定できたんだ？」

「それはな、俺にバイオ族の血が宿っているだろ。その能力みたいだ」

僕は正直驚いた！でもすぐに雄大が隼人の居場所を教えようとしたから正気に戻った

「隼人はバイオ族のアジトと言っていたんだよな・・・そしたらここから100キロ離れている村に連れて行かれてるみたいだ。」

僕は少し頭を働かせた。バイオ族の事だからいくら遠くてもすぐに行ける瞬歩ぐらい使えるのであろう

僕はそう思いながらも少し雄大に嫉妬を覚えた。僕は少し心の中でバイオ族になりたいと思っていたのかもしれない。そしてその気持ち次第に大きくなってきた。

僕はそんな遠い所までどうやっていくか迷った。

雄大と結城は明日にしようって言うてるけど僕は反対した。

でも結局、その二人の論に押されて論破されてしまった。僕にも語彙力があればいいのになって思ってしまった。

そう思ってる中、結城が明日のために家に帰って明日の用意をするって言ったから僕も帰ろうとした。

「雄大、また明日な！バイバイ」

「おう、バイバイ」

そうやって雄大と別れた後結城とも別れ僕は家に帰った。

そして親にそのことを説明しようとしたが親を巻き込むと面倒になると思いやめておいた！

そして僕は親に「明日友達の試合があるからそれを見に行くね」という偽りをついた。

そして僕は、二階に上がり明日の用意をした。いつも通りお金と時計は持っていくようにしているのでそれを忘れずカバンに入れて後

はもしもの時のために紐とライターそれにエアージェンをカバンに入れた。もうこんな準備をしていると夜の8時だ。

「白竜、いるのなら夕飯が出来たから降りてきなさい！」

お母さんの声が一階から聞こえてきた。

「はいはい」

僕はめんどくさそうに返事をした。そして一階に降りた。

今日の夜ご飯はから揚げのようだ。僕の好物だったので僕はうれしかった。

からあげを明日のために二つこっそりとサランラップに包んでカバンに入れた。

夕飯も食べ終わった事だしもう寝ようとした。

そして二階に上がり僕は最後に携帯をチェックした。

誰からもメールも電話もきていなかった。

明日は早起きしないといけないから今日は寝ようと思いベッドに入った。

それで何分たっただろう。ベッドに入ってから15分たったところ「ブーブー」

マナーモードにしてる携帯が鳴った。僕はベッドから手を伸ばし携帯をとった。

隼人からだった！！

「隼人今どこにいるんだ？」

「・・・」

「おい、隼人？大丈夫か」

「・・・ブチッ」

「おい隼人ー」
ちくしょう隼人め、大丈夫かな・・・そんな事を考えていたら寝てしまった。

バイオ一族【衝撃の展開】（後書き）

次回！！隼人の真相やいかに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5189ba/>

名無しからの手紙

2012年1月14日17時55分発行